

琉球大学学術リポジトリ

介護等体験の実践に関する研究(第3報) ー受け入れ学校および福祉施設に対する質問紙調査からー

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 敦士, 片岡, 淳, Tanaka, Atsushi, Kataoka, Jun メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/871

介護等体験の実践に関する研究（第3報）

—受け入れ学校および福祉施設に対する質問紙調査から—

田中 敦士* 片岡 淳**

Practice of the Experience of Care for Elderly and/or Person with
Disability (the 3rd report)

— Conclusion from a survey for special schools and welfare institutions —

Atsushi Tanaka* Jun Kataoka**

I はじめに

介護等体験は、「個人の尊厳と社会連帯の理念」を深めることを目的としている。この趣旨は介護等体験特例法にも明記されており、お互いの違いを認め合い、尊重し、共に生きるという理念を深めることにつながることを期待されている。

しかしながら、介護等体験後、一部の学生による無断欠勤や無断外出、遅刻、障害者への人権侵害など、本大学生の基本的マナーの欠如、介護等体験に対する目的意識の不足等の苦情が跡を絶たない。これは介護等体験の趣旨が学生の間きちんとして浸透していないこととともに、事前事後指導の在り方にも少なからず問題があるからであると思われる。

そこで、平成16年度琉球大学教育研究重点化経費による介護等体験プロジェクトを立ち上げ、その一環として2つの調査を実施した。第1報では文献研究や琉球大学での実践の現状を報告した(田中・片岡, 2006a)。第2報では、1つ目の調査として、介護等体験の対象学生165名を対象に意識調査を行った(田中・片岡, 2006b)。それらを踏まえ、今回の第3報では、2つめの調査として、介護等体験の受け入れ先となる特殊教育諸学校及び福祉施設を対象とした意識調査の結果について報告する。受け入れ先の学校及び施設が、本大学体験学生の態度及び知識についてどのような印象

を持っているのか、また、介護等体験に対してどのような考え方をしているのか等を明らかにすることを目的とする。さらに、第2報の結果も踏まえ、介護等体験の問題点や課題を明らかにして、今後よりよい介護等体験が行われるために必要と思われる学生の意識向上を図るような事前事後指導のあり方について検討する。

II 調査方法

1 調査対象

平成16年度に介護等体験を受け入れた社会福祉施設49施設及び特殊教育諸学校5校、計54施設を対象とした。機関種別の対象施設数及び回収施設数・回収率は表1の通りである。

表1 機関種別の対象施設数及び回収数・回収率

機関種別	対象施設数	回収施設数	回収率
老人福祉施設	33	26	78.7%
身体障害児・者施設	3	3	100.0%
知的障害児・者施設	9	7	77.8%
その他の施設	4	4	100.0%
特殊教育諸学校	5	3	60.0%
計	54	43	79.6%

*老人保健施設を含む

*琉球大学教育学部障害児教育教室

**琉球大学教育学部島嶼文化教室

2 調査期間

2005年1月20日に質問紙調査票を受け入れ先の特殊教育諸学校および福祉施設に配布し、2月28日を回答期限として回答を依頼した。

3 調査内容

質問紙調査票の主な質問項目は以下の通りである。

(1) フェイスシート

「回答者の属性（機関種別）」および「介護等体験で学生に体験させた活動内容」について、選択肢を設けて回答を求めた。

(2) 介護等体験について

受け入れ施設及び学校と体験学生の介護等体験についての意識を比較するために、学生に対しての調査の中で使用した「介護等体験についての意識（第2報の表Ⅱ-2）」（田中・片岡, 2006b；以下省略）と同様の項目を設け（項目⑫⑬は学生が感じる義務感や自主性について知るための項目であり、学校及び施設に対しての質問項目としては適さないためここでは削除した）、介護等体験受け入れ学校及び施設が、介護等体験についてどのように考えているのかを明らかにした。

(3) 受け入れ学生への印象について

受け入れ学校及び施設が体験学生についてどのような印象を持ったのかについて知るため、以下の質問項目を設けた（表2）。

表2 受け入れ学生に対しての印象

- 1 貴施設・学校に参加した受け入れ学生についてどのように感じましたか。次の①～⑥の質問に対して受け入れ学生の様子にもっとも近いと思われる番号にひとつだけ○をつけてください。
 - ①受け入れ学生は、介護等体験の意義や目的を持って積極的意欲的に活動に取り組んだ。
 - ②受け入れ学生は、積極的に高齢者や障害児・者とコミュニケーションを取るよう努めていた。
 - ③受け入れ学生は、楽しんで介護等体験に参加していた。
 - ④受け入れ学生は、わからないことがあれば、積極的に職員教師に質問するなどしていた。
 - ⑤介護等体験に参加した学生の知識は十分であった。
 - ⑥介護等体験に参加した学生の態度は十分であった。

回答者の受け入れ学生に対しての印象に関する6項目に対して、「5-とても思う 4-やや思う 3-どちらでもない 2-あまり思わない 1-全く思わない」の5件法にて回答を求めた。

また、体験学生に対しての苦情を把握するため、「介護等体験期間において体験学生に対して困ったことがありますか」という質問項目を加え、学生に対しての調査の中で使用した（「施設・学校職員からの注意ごと（第2報の表Ⅱ-4）」と同様の項目を設け、表記されている16項目の中から、体験学生に対してどのような困ったことがあったのかを複数回答でそれぞれ回答してもらうことで、その実態を明らかにした。

(4) 学生を受け入れることについて

学生を受け入れることに対しての不安について知るために、以下の質問項目を作成した。

表3 学生を受け入れる際不安

- 1 あなたは、学生を受け入れるにあたって、不安がありましたか。
 1. あった
 2. なかった

前出の質問に対して「1. あった」と回答した者を対象に、「不安理由（表4）」に表記されている6項目の中から、どのような理由から不安があったのかを複数回答で求めた。

表4 不安理由（複数回答可）

1. 初めてのため
2. 過去の受け入れによる不安
3. 学生の知識に対する不安
4. 利用者や児童・生徒への影響に対する不安
5. 準備態勢に対する不安
6. その他

これまでの介護等体験において、体験学生はどのような観点で体験に望めばよいのか戸惑っている様子が見られたため、受け入れ学校及び施設がどのような観点で学生を体験させたのかを明らかにするため、以下の質問項目を作成した（表5）。

表5 学生に対しての体験観点

-
- 2 学生にはどのような観点で体験させましたか。
1. 支援者の観点 2. 利用者・児童生徒の観点
3. その両方の観点 4. その他
-

介護等体験によって、受け入れ学校及び施設に対してどのようなメリットがあったのかを知るために、以下の質問項目を作成した(表6)。

表6 学生受け入れのメリット

-
- 3 学生を受け入れてメリットがありましたか。
1. あった 2. なかった
-

前出の質問に対して「1. あった」と回答した者を対象に、「メリットの理由(表7)」に表記されている8項目の中から、どのようなメリットがあったのかを複数回答で求めた。メリット理由の項目は、武蔵・高畑・若山ら(2001)の「教員向け介護等体験アンケート調査」を参考にして作成した。

表7 メリット理由(複数回答可)

-
1. 利用者、児童・生徒にとってよい刺激となった
2. 職員・教師の負担の軽減につながった
3. 福祉に関する教育への啓蒙に役立った
4. 障害児教育への啓蒙に役立った
5. 環境整備等に役立った
6. 利用者、児童・生徒への接し方がうまくなった
7. 利用者、児童・生徒のことを理解してくれた
8. その他
-

さらに、介護等体験によって、受け入れ学校及び施設に対してどのようなデメリットがあったのかを知るために、以下の質問項目を作成した(表8)。

表8 学生受け入れのデメリット

-
- 4 学生を受け入れてデメリットがありましたか。
1. あった 2. なかった
-

前出の質問に対して「1. あった」と回答した

者を対象に、「デメリット理由(表9)」に表記されている7項目の中から、どのようなデメリットがあったのかを複数回答で尋ねた。デメリットの理由の項目は、武蔵・高畑・若山ら(2001)を参考にして作成した。

表9 デメリット理由(複数回答可)

-
1. 職員、教師の負担が増える
2. 利用者、児童・生徒に緊張や不安を与える
3. 受け入れ準備態勢が負担である
4. 学生の高齢者や障害児・者に対する理解が不十分である
5. 差別感を助長する恐れがある
6. 学生の利用者や児童・生徒への接し方が不十分である
7. その他
-

(5) 事前指導について

受け入れ学校及び施設がどのような事前指導の内容を望んでいるのかを知るために、学生に対しての調査の中で使用した「事前指導において必要だと思う内容(第2報の表Ⅱ-10)」に表記されている16項目の中から、必要だと思う内容を複数回答でそれぞれ回答を求めた。

(6) 大学側への要望について

今後充実した介護等体験を行うためにも、学生を送り出す大学側はさらなる工夫と改善を図る必要がある。そこで、受け入れ学校及び施設が、大学側に対して要望があるのかを知るため以下の質問項目を作成した(表10)。

表10 大学側への要望

-
- 1 大学側への要望はありますか。
1. ある 2. ない
-

前出の質問に対して「1. ある」と回答した者を対象に、「大学側への要望事項(表11)」に表記されている6項目の中から、どのような要望があるのかを複数回答可で求めた。要望事項の項目は、武蔵・高畑・若山ら(2001)を参考にして作成した。

表 11 大学側への要望事項（複数回答可）

1. 介護等体験の趣旨や経緯の説明
2. 講義等による事前指導の充実
3. 大学教官の付き添い
4. 講義等による事後指導の充実
5. 学生の意識・態度の向上を図る
6. その他

Ⅲ 結果

1 フェイスシート

(1) 回収率

本調査では、調査票を配布した54学校・施設（以下「施設」と標記する）のうち、43施設から有効回答が得られ、回収率は79.6%であった。

(2) 回答者の機関種別

回答者の機関種別を図1に示した。機関種別については、「老人福祉施設」が一番多く、26施設（60.4%）であった。次いで、「知的障害児・者施設」が7施設（16.3%）、「特殊教育諸学校」が4校（9.3%）、「身体障害児・者施設」と「その他の施設」が3施設（7.0%）であった。「その他の施設」の項目では、「児童養護施設」や「乳児院」が含まれている。

(3) 介護等体験で学生に体験させた活動内容

介護等体験で学生に体験させた活動内容を表12に示した。「話し相手」と回答した者が最も多く、37名（86.0%）であった。「レクリエーション活動への参加」が32名（74.4%）、「移動介助」が29名（67.4%）と続いた。

機関種別で見ると、「老人福祉施設」では、「話し相手」と回答した者が多く、26名（100%）であった。次いで、「レクリエーション活動への参加」が24名（92.3%）、「食事介助」が22名（84.6%）であった。

「身体障害児・者施設」では、「移動介助」と「話し相手」、「レクリエーション活動への参加」と回答した者が3名（100.0%）であった。

「知的障害児・者施設」では、「作業介助」と「話し相手」、「レクリエーション活動への参加」と回答した者が5名（71.4%）であった。

「特殊教育諸学校」では、「移動介助」と「行事の補佐」と回答した者が多く、3名（75.0%）であった。次いで、「作業介助」と「排泄介助」、「話し相手」が2名（50.0%）であった。

乳児院や児童養護学校を含む「その他の施設」では、「話し相手」と「行事の補佐」、「レクリエーション活動への参加」のみで、1名（33.3%）であった。

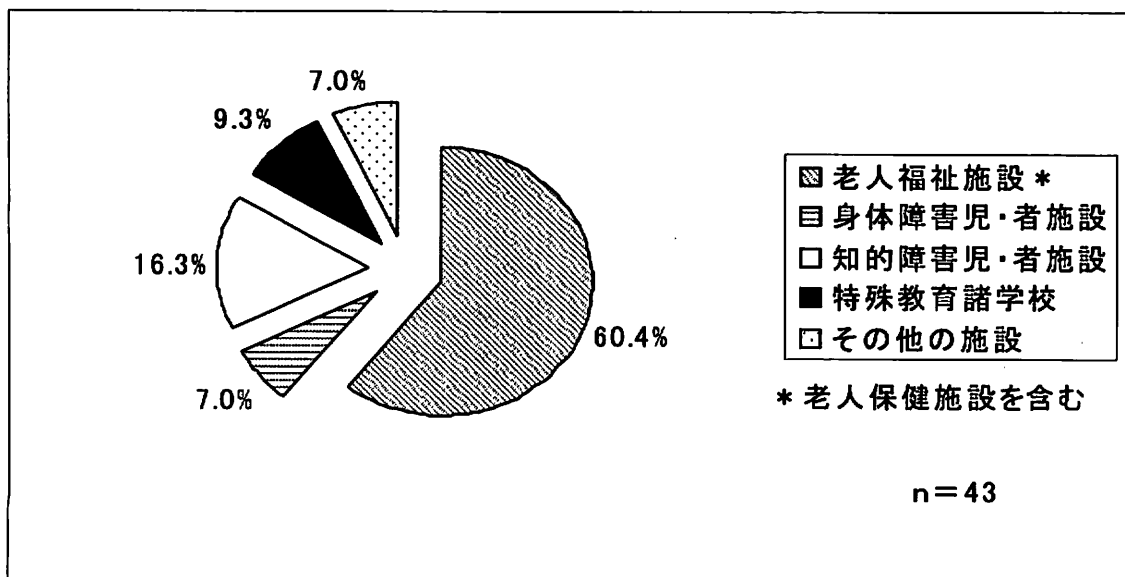


図 1 介護等体験受け入れ機関種別

表12 介護等体験で学生に体験させた活動内容

	老人福祉 施設	身体障害 児・者施設	知的障害 児・者施設	特殊教育 諸学校	その他の 施設	全体
1. 移動介助	20(76.9%)	8(100.0%)	3(42.9%)	3(75.0%)	0(0.0%)	29(67.4%)
2. 食事介助	22(84.6%)	2(66.7%)	2(28.6%)	1(25.0%)	0(0.0%)	27(62.8%)
3. 作業介助	9(34.6%)	1(33.3%)	5(71.4%)	2(50.0%)	0(0.0%)	17(39.5%)
4. 入浴脱衣介助	9(34.6%)	1(33.3%)	0(0.0%)	1(25.0%)	0(0.0%)	11(25.6%)
5. 排泄介助	4(15.4%)	0(0.0%)	1(14.3%)	2(50.0%)	0(0.0%)	7(16.3%)
6. 話し相手	26(100.0%)	3(100.0%)	5(71.4%)	2(50.0%)	1(33.3%)	37(86.0%)
7. 散歩の付き添い	14(53.8%)	2(66.7%)	3(42.9%)	0(0.0%)	0(0.0%)	19(44.2%)
8. 行事の補佐	14(53.8%)	2(66.7%)	2(28.6%)	3(75.0%)	1(33.3%)	22(51.2%)
9. 草刈などの雑務	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	1(25.0%)	0(0.0%)	1(2.3%)
10. 事務補助	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	1(25.0%)	0(0.0%)	1(2.3%)
11. レクリエーション活動への参加	24(92.3%)	3(100.0%)	5(71.4%)	0(0.0%)	1(33.3%)	32(74.4%)
12. その他	4(15.4%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	4(9.3%)
n	26	3	7	4	3	43

*各施設で上位3項目を網掛けにした

(複数回答)

2 介護等体験について

表13は、介護等体験に対する考え方について、介護等体験を受け入れている学校及び施設側の意識を示したものである。ほとんどの項目において、回答者は「やや思う」と回答している。特に、「1. 高齢者や障害児・者に対する理解を深めるきっかけとなる」、「10. 高等学校教員免許状についても義務化するべきである」、「11. 小・中学校の教員になろうとする人にとって必要なものである」という3つの項目においては、「とても思う」と答えている。これより、受け入れ学校及び施設も介護等体験に対して概ね肯定的な考えを持っていることがわかった。しかし、介護等体験期間については、約4割の回答者が「短すぎる」と考えていることも明らかとなった。

3 受け入れ学生への印象について

(1) 受け入れ学生に対しての印象

表14は、介護等体験中の受け入れ学生について、受け入れ学校及び施設の評価を示したものである。受け入れた学校及び施設は、体験学生を介護等体験に対する目的意識を持って積極的・意欲的に利用者や児童・生徒及び職員・教師と関わっていた、と体験学生を評価していることがわかる。

しかし、一方で「介護等体験に参加した学生の知識は十分であった」という項目において、「あ

まり思わない」と回答している者が21名(48.3%)もいた。多くの項目において「どちらでもない」という回答が多かったのは、受け入れ学生は様々であり、やる気のある者もいればそうでない者もいるわけで、一概にまとめて評価することが難しかったからであろうと推測される。

(2) 受け入れ学生に対して困ったこと

受け入れ学生に対して困ったことを表15に示した。「消極的態度」と答えた者が一番多く、24名(55.8%)であった。次いで、「目的意識の欠如」が20名(46.5%)、「やる気のなさ」が11名(25.6%)であった。「その他」の項目では、「食事代金の未納」、「介護等体験証明書の紛失による再発行」など、介護等体験以前の問題が挙げられていた。

4 学生を受け入れることについて

(1) 学生を受け入れる際の不安

学生を受け入れる際の不安を表16に示した。社会福祉施設を「施設群」、特殊教育諸学校を「学校群」とした。「学生を受け入れるにあたって不安がありましたか」という項目に対して、「施設群」で「あった」と回答した者は15名(38.5%)、「学校群」では1名(25.0%)であった。全体では、16名(37.2%)であった。どの群におい

表13 受け入れ側の介護等体験の意識

	とても思う	やや思う	どちらでもない	あまり 思わない	全く 思わない
1. 高齢者や障害児・者に対する理解を深めるきっかけとなる。	30(69.8%)	12(27.9%)	1(2.3%)	0(0.0%)	0(0.0%)
2. 高齢者や障害児・者に対する誤解や偏見をなくすることができる。	13(30.2%)	22(51.2%)	6(14.0%)	2(4.7%)	0(0.0%)
3. 相手があるがままに受け入れ、理解する態度を身につける。	7(16.3%)	26(60.5%)	3(7.0%)	4(9.3%)	1(2.3%)
4. 児童生徒理解、人間理解、コミュニケーション能力を身につける。	5(11.6%)	29(67.4%)	4(9.3%)	3(7.0%)	0(0.0%)
5. 高齢者や障害児・者に対する介助・支援の仕方を知ることができる。	5(11.6%)	28(65.1%)	3(7.0%)	5(11.6%)	0(0.0%)
6. 相手を思いやる気持ちを学ぶことができる。	11(25.6%)	23(53.5%)	6(14.0%)	1(2.3%)	0(0.0%)
7. 社会福祉施設や特殊教育諸学校の様子をを知ることができる。	14(32.6%)	23(53.5%)	3(7.0%)	1(2.3%)	0(0.0%)
8. 社会福祉施設や特殊教育諸学校の仕事内容を知ることができる。	8(18.6%)	27(62.8%)	5(11.6%)	1(2.3%)	0(0.0%)
9. 介護等体験の期間（施設2日間、学校5日間）は短すぎる。	6(14.0%)	15(34.9%)	13(30.2%)	5(11.6%)	2(4.7%)
10. 高等学校教員免許状についても義務化するべきである。	20(46.5%)	13(30.2%)	6(14.0%)	2(4.7%)	0(0.0%)
11. 小・中学校の教員になろうとする人にとって必要なものである。	22(51.2%)	12(27.9%)	7(16.3%)	0(0.0%)	0(0.0%)

*各質問において上位を網掛けにした

n = 43

*逆転項目（否定的）

表14 受け入れ学生に対しての印象

	とても思う	やや思う	どちらでもない	あまり 思わない	全く 思わない
1. 意義や目的意識をもって積極的・意欲的に活動に取り組んだ。	1(2.3%)	18(41.9%)	12(27.9%)	11(25.6%)	0(0.0%)
2. 積極的に高齢者や障害児・者とコミュニケーションを取るよう努めていた。	3(7.0%)	19(44.2%)	15(34.9%)	5(11.6%)	0(0.0%)
3. 楽しんで介護等体験に参加していた。	1(2.3%)	14(32.6%)	19(44.2%)	8(18.6%)	0(0.0%)
4. わからないことがあれば、積極的に職員・教師に質問していた。	1(2.3%)	15(34.9%)	15(34.9%)	11(25.6%)	0(0.0%)
5. 介護等体験に参加した学生の知識は十分であった。	0(0.0%)	3(7.0%)	14(32.6%)	21(48.3%)	4(9.3%)
6. 介護等体験に参加した学生の態度は十分であった。	4(9.3%)	15(34.9%)	18(41.9%)	5(11.6%)	0(0.0%)

*各質問において上位を網掛けにした

n = 43

でも「なかった」と回答した者が多かった。

(2) 不安理由

不安理由を表17に示した。学生を受け入れる際不安があったと回答した者は、全体で16名で

あった。その理由として、「学生の知識に対する不安」と回答した者が多く、12名（75.0%）であった。次いで、「利用者や児童生徒への影響に対する不安」が5名（31.3%）であった。

機関種別で見ると、「施設群」で不安があった

表15 受け入れ学生に対して困ったこと

	全体 n=43
1. 無断欠席	1(2.3%)
2. 無断外出	0(0.0%)
3. 遅刻	8(18.6%)
4. 学生同士の私語	6(14.0%)
5. 服装の乱れ	4(9.3%)
6. 装飾品の着用	0(0.0%)
7. 言葉遣い	8(18.6%)
8. 反抗的な態度・言動	1(2.3%)
9. やる気のなさ	11(25.6%)
10. 眠たそうな態度	4(9.3%)
11. 消極的態度	24(55.8%)
12. 目的意識の欠如	20(46.5%)
13. 忘れ物	3(7.0%)
14. 礼状の送付	3(7.0%)
15. 高齢者・障害者への人権侵害	0(0.0%)
16. その他	3(7.0%)
*上位3項目を網掛けにした	(複数回答)

表16 学生を受け入れる際の不安

	施設群	学校群	全体
1. あった	15(38.5%)	1(25.0%)	16(37.2%)
2. なかった	23(59.0%)	3(75.0%)	26(60.5%)
n	39	4	43

表17 不安理由

	施設群	学校群	全体
1. 初めてのため	2(13.3%)	0(0.0%)	2(12.5%)
2. 過去の受け入れ不安	3(20.0%)	0(0.0%)	3(18.8%)
3. 学生の知識に対する不安	11(73.9%)	1(100.0%)	12(75.0%)
4. 利用や児童生徒への影響に対する不安	4(26.7%)	1(100.0%)	5(31.3%)
5. 準備態勢に対する不安	4(26.7%)	0(0.0%)	4(25.0%)
6. その他	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
n	15	1	16

*各群で上位2項目を網掛けした

(複数回答)

表17 学生に対しての体験観点

	施設群	学校群	全体
1. 支援者の観点	7(17.9%)	2(50.0%)	9(20.9%)
2. 利用者、児童生徒の観点	7(17.9%)	1(25.0%)	8(18.6%)
3. その両方の観点	22(56.4%)	1(25.0%)	23(53.5%)
4. その他	2(5.1%)	0(0.0%)	2(4.7%)
n	39	4	43

と回答した者は15名であった。その理由として、「学生の知識に対する不安」と回答した者が多く、11名(73.3%)であった。次いで、「利用者や児童生徒への影響に対する不安」と「準備態勢に対する不安」が4名(26.7%)であった。

「学校群」で不安があったと回答した者は1名であった。その理由として、「学生の知識に対する不安」と利用者や児童生徒への影響に対する不安」と回答していた。

(3) 学生に対しての体験観点

学生に対しての体験観点を表18に示した。回答者の学生に対しての体験観点について、「その両方の観点」と回答した者が多く、23名(53.5%)であった。次いで、「支援者の観点」が9名(20.9%)、「利用者、児童生徒の観点」が8名(18.6%)であった。

機関種別で見ると、「施設群」では、「その両方の観点」と回答した者が多く、22名(56.4%)であった。次いで、「支援者の観点」と「利用者、児童生徒の観点」が7名(17.9%)であった。「学校群」では、「支援者の観点」と回答した者が2名(50.0%)、「利用者、児童生徒の観点」と「その両方の観点」が1名(25.0%)であった。

「その他」の項目には、「介護が人として当然の事としての観点」、「文化背景や世代の異なる方々へ自分を受け入れてもらえるような対応を心がけるように」などが挙げられていた。

(4) 学生受け入れのメリット

学生受け入れのメリットを表19に示した。「学生を受け入れてメリットがありましたか」という項目に対して、「施設群」で「あった」と回答した者は32名(82.1%)、「学校群」では3名(75.0%)であった。全体では35名(81.4%)であった。どの群においても「あった」と回答した者が多かった。

表19 学生受け入れのメリット

	施設群	学校群	全体
1. あった	32(82.1%)	3(75.0%)	35(81.4%)
2. なかった	5(12.8%)	1(25.0%)	6(14.0%)
n	39	4	43

(5) メリットの理由

学生受け入れのメリットの理由を表20に示した。学生を受け入れることによるメリットがあったと回答した者は35名であった。その理由として、「福祉に関する教育への啓蒙に役立った」と回答した者が多く、25名(71.4%)であり、「利用者、児童生徒にとってよい刺激となった」が22名(62.9%)であった。

機関種別で見ると、「施設群」でメリットがあったと回答した者は32名であった。その理由としては全体での傾向と同様で、「福祉に関する教育

表20 メリット理由

	施設群	学校群	全体
1. 利用者、児童生徒にとってよい刺激になった	21(65.6%)	1(33.3%)	22(62.9%)
2. 職員、教師の負担軽減につながった	3(9.4%)	1(33.3%)	4(11.4%)
3. 福祉に関する教育への啓蒙に役立った	23(71.9%)	2(66.7%)	25(71.4%)
4. 障害児教育への啓蒙に役立った	4(12.5%)	3(100.0%)	7(20.0%)
5. 環境整備等に役立った	2(6.3%)	1(33.3%)	3(8.6%)
6. 利用者、児童生徒への接し方がうまくなった	5(15.6%)	0(0.0%)	5(14.3%)
7. 利用者、児童生徒のことを理解してくれた	16(50.0%)	1(33.3%)	17(48.6%)
8. その他	1(3.1%)	0(0.0%)	1(2.9%)
n	32	3	35

*各群で上位2項目を網掛けた

(複数回答)

への啓蒙に役立った」と回答した者が23名(71.9%)、「利用者、児童生徒にとってよい刺激となった」が21名(65.6%)であった。

「学校群」でメリットがあったと回答した者は3名であった。その理由として、「障害児教育への啓蒙に役立った」と回答した者が多く、3名(100%)であった。次いで、「福祉に関する教育への啓蒙に役立った」が2名(66.7%)であった。

(6) 学生受け入れのデメリット

学生受け入れのデメリットを表21に示した。「学生を受け入れてデメリットがありましたか」という項目に対して、「施設群」で「あった」と回答した者は22名(56.4%)、「学校群」では2名(50.0%)であった。全体では24名(55.8%)であった。全体として「あった」と回答した者が過半数を占めた。

表21 学生受け入れのデメリット

	施設群	学校群	全体
1. あった	22(56.4%)	2(50.0%)	24(55.8%)
2. なかった	16(41.2%)	2(50.0%)	18(41.9%)
n	39	4	43

(7) デメリット理由

デメリット理由を表22に示した。学生を受け入れることによるデメリットがあったと回答した理由として、「職員、教師の負担が増える」と回答した者が多く、17名(70.8%)であった。次いで、「学生の利用者や児童生徒への接し方が不十分である」が7名(29.2%)、「学生の高齢者や障

表22 デメリット理由

	施設群	学校群	全体
1. 職員、教師の負担が増える	17(77.3%)	0(0.0%)	17(70.8%)
2. 利用者、児童生徒に緊張や不安を与える	2(9.1%)	0(0.0%)	2(8.3%)
3. 受け入れ準備が負担である	2(9.1%)	2(100.0%)	4(16.7%)
4. 学生の高齢者や障害児・者に対する理解が不十分である	6(27.3%)	0(0.0%)	6(25.0%)
5. 差別感を助長する恐れがある	1(4.5%)	0(0.0%)	1(4.2%)
6. 学生の利用者や児童生徒への接し方が不十分である	6(27.3%)	1(50.0%)	7(29.2%)
7. その他	4(18.2%)	0(0.0%)	4(16.7%)
n	22	2	24

*各群で上位を網掛けした

(複数回答)

表23 受け入れ側が事前指導において必要だと思う内容

	老人福祉 施設	身体障害 児・者施設	知的障害 児・者施設	特殊教育 諸学校	その他の 施設	全体
1. 介護等体験の概要	14(53.8%)	1(33.3%)	3(42.9%)	0(0.0%)	2(66.7%)	20(46.5%)
2. 介護等体験の意義・目的	20(76.9%)	2(66.7%)	5(71.4%)	4(100.0%)	2(66.7%)	33(76.7%)
3. 施設及び特殊教育諸学校の概要	11(42.3%)	1(33.3%)	4(57.1%)	2(50.0%)	3(100.0%)	21(48.8%)
4. 車椅子の介助の仕方	6(23.1%)	1(33.3%)	1(14.3%)	1(25.0%)	0(0.0%)	9(20.9%)
5. 食事の介助の仕方	6(23.1%)	0(0.0%)	1(14.3%)	0(0.0%)	0(0.0%)	7(16.3%)
6. 排泄介助	2(7.7%)	0(0.0%)	1(14.3%)	1(25.0%)	0(0.0%)	4(9.3%)
7. 関り方について	9(34.6%)	2(66.7%)	4(57.1%)	3(75.0%)	3(100.0%)	21(48.8%)
8. 介護・支援者としての心構え	13(50.0%)	2(66.7%)	4(57.1%)	3(75.0%)	0(0.0%)	22(51.2%)
9. 老いや障害についての基礎的知識	17(65.4%)	1(33.3%)	4(57.1%)	2(50.0%)	0(0.0%)	24(55.8%)
10. 障害の類似体験	5(19.2%)	1(33.3%)	2(28.6%)	1(25.0%)	0(0.0%)	9(20.9%)
11. 実際の体験内容	4(15.4%)	1(33.3%)	1(14.3%)	0(0.0%)	0(0.0%)	6(14.0%)
12. 服装・勤務態度について	9(34.6%)	1(33.3%)	2(28.6%)	3(75.0%)	2(66.7%)	17(39.5%)
13. トラブルの対処法	1(3.8%)	0(0.0%)	1(14.3%)	0(0.0%)	0(0.0%)	2(4.7%)
14. 施設の事前観察	2(7.7%)	1(33.3%)	4(57.1%)	0(0.0%)	2(66.7%)	9(20.9%)
15. 関連するテーマのビデオ・映画鑑賞	4(15.4%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	4(9.3%)
16. その他	3(11.5%)	1(33.3%)	1(14.3%)	0(0.0%)	0(0.0%)	5(11.6%)
n	26	3	7	4	3	43

*各施設で50%以上の項目を網掛けにした

(複数回答)

害児・者に対する理解が不十分である」が6名(25.0%)と続いた。

機関種別で見ると、「施設群」では「職員、教師の負担が増える」が17名(77.3%)という回答が多かったのに対し、「学校群」では「受け入れ準備が負担である」が2名(100%)と、その理由に対して「施設群」と「学校群」では若干の違いがみられた。

5 事前指導について

表23は、受け入れ側が事前指導において必要だと思う内容である。最も回答が多かった項目は、「介護等体験の意義・目的」で33名(76.7%)であった。次いで、「老いや障害についての基礎的知識」が24名(55.8%)であった。

機関種別で見ると、「老人福祉施設」では、「介護等体験の意義・目的」と回答した者が多く、20名(76.9%)であった。次いで、「老いや障害

についての基礎的知識」が17名(65.4%)であった。

「身体障害児・者施設」では、「介護等体験の意義・目的」と「関り方について」、「介護・支援者としての心構え」が2名(66.7%)であった。

「知的障害児・者施設」では、「介護等体験の意義・目的」が5名(71.4%)であった。

「特殊教育諸学校」では、「介護等体験の意義・目的」と回答した者が多く、4名(100%)であった。次いで、「関り方について」と「介護・支援者としての心構え」、「服装・勤務態度について」が3名(75.0%)であった。

「その他の施設」では、「施設及び特殊教育諸学校の概要」と「関わり方について」と回答した者が多く、3名(100%)であった。

6 大学側への要望について

(1) 大学側への要望

大学側への要望を表24に示した。「大学側への要望はありますか」という項目に対して、「施設群」で「ある」と回答した者は29名(74.4%)、「学校群」では4名(100%)であった。全体では38名(88.4%)であり、大半が要望があり、裏返せば不満があることが明らかとなった。

表24 大学側への要望

	施設群	学校群	全体
1. ある	29(74.4%)	4(100.0%)	38(88.4%)
2. ない	9(23.1%)	0(0.0%)	4(9.3%)
n	39	4	43

表25 大学側への要望事項

	施設群	学校群	全体
1. 介護等体験の趣旨や経緯の説明	20(69.0%)	0(0.0%)	20(52.6%)
2. 講義等による事前指導の充実	18(62.1%)	4(100.0%)	22(57.9%)
3. 大学教官の付き添い	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
4. 講義等による事後指導の充実	11(37.9%)	1(25.0%)	12(31.6%)
5. 学生の意識・態度の向上を図る	20(69.0%)	4(100.0%)	24(63.2%)
6. その他	5(17.2%)	1(25.0%)	6(15.8%)
n	29		38

*各群で上位2項目を網掛けにした

(複数回答)

(2) 大学側への要望事項

大学側への要望事項を表25に示した。大学側への要望があると回答した者は全体で38名であったが、その要望事項として、「学生の意識・態度の向上」と回答した者が多く、24名(63.2%)であった。次いで、「講義等による事前指導の充実」が22名(57.9%)が続いた。

機関種別で見ると、「施設群」での要望事項として、「介護等体験の趣旨や経緯の説明」と「学生の意識・態度の向上」と回答した者が多く、20名(69.0%)であった。

「学校群」の要望事項として、「講義等による事前指導の充実」と「学生の意識・態度の向上」と回答した者が多く、4名(100%)であった。

「介護等体験の趣旨や経緯の説明」と回答した者は「施設群」では最も多かったが、「学校群」において全くいなかった。

「その他」の項目では、「介護等体験証明者について、大学でも再発行はない旨を徹底してほしい」という、介護等体験証明書の再発行について挙げられていた。紛失して再発行を求める学生が少なからず存在し、先方に多大な迷惑をかけていることがわかった。

IV 考察

1 受け入れ学校及び施設にとっての介護等体験の意義

受け入れ学校及び施設における介護等体験についての意識(表13)のほとんどの項目で「やや思う」と肯定的に回答していた。特に、「10. 高等学校教員免許状についても義務化するべきであ

る」、「11. 小・中学校の教員になろうとする人にとって必要なものである」という項目においては、第2報での体験学生の結果に比べて、「とても思う」と回答している割合が高く、その必要性を受け入れ側の方が強く感じていることがわかる。これは、将来教員になるであろう若者に対する強い期待の表われとも解釈することができる。

しかし、介護等体験によって身につけることができる項目(相手を受け入れる態度やコミュニケーション能力など)については、体験学生と比較すると「とても思う」と回答している割合が低く、体験学生よりは否定的な評価となっている。これは、受け入れ学校及び施設が、介護等体験期間について、体験学生よりも「短く、十分ではない」と評価しているからであろう。受け入れ学校及び施設では、介護等体験を通して実際に高齢者や障害児・者と接することで、高齢者や障害児・者に対する理解を深めるきっかけにはなるものの、本当に高齢者や障害児・者に対する偏見をなくすためには、十分な期間ではないと感じているためと考えられる。

また、受け入れ学校及び施設にとって、介護等体験は「福祉に関する教育への啓蒙に役立ち、利用者、児童生徒にとってよい刺激になる」というメリットを持っていることも明らかとなった。しかし、同時に「職員、教師の負担が増える、受け入れ準備が負担である」というデメリットを感じていることも明らかとなり、介護等体験によって少なからず受け入れ学校及び施設に負担を強いていることがうかがえる。それらの負担は、学生のやる気のなさやいいかげんな態度などに起因することも多いと考えられる。大学側は、しっかりと目的意識を持った学生を送り出すために、もっと努力を図らなければならないであろう。

2 介護等体験の参加状況への評価について

受け入れ学校及び施設は、受け入れ学生の印象についてのほとんどの項目(表14「受け入れ学生への捉え方」)において、「やや思う」と回答しており、おおむね肯定的な捉え方をしていることが明らかとなった。しかし、第2報での学生自身の自己評価と比べると、すべての項目において低

い評価となっている。特に、参加した学生の知識については、「十分あった」と回答した者はわずかに3名(7.0%)にすぎなかった。

また、約5割の受け入れ学校及び施設が、受け入れ学生に対して困ったこととして、「消極的な態度」、「目的意識の欠如」を挙げている。このことから、体験学生と受け入れ学校及び施設との間にギャップがあったと言えよう。

3 事前指導に対する受け入れ学校及び施設の評価

約6割の受け入れ施設及び学校が、大学側への要望事項(表25「大学側への要望事項」)として、「講義等による事前指導の充実」、「学生の意識・態度の向上を図る」ことを挙げている。また、学生を受け入れる際の不安があったと回答した16名(37.2%)のうち、12名(75.0%)が「学生の知識に対する不安」と回答している。受け入れ学校及び施設の不安を解消するためにも、学生の意識向上を図るための充実した事前指導のあり方を検討していく必要がある。

4 事前指導の充実のための課題

介護等体験以前において、障害児・者との接触機会がなかった者が4割もいる(第2報)状況で、介護等体験によって様々なことを学び、感じ、考えることができ、とても多くの意義があったことが本調査から実証された。介護等体験の期間について、学生と受け入れ学校及び施設から「十分でない」と指摘され、介護等体験をより充実させるために、介護等体験期間を現状よりも長く設定する方が求められていることも明らかとなった。しかし、介護等体験は少なからず受け入れ学校及び施設に対して負担を強いるものであり、また、全ての受け入れ学校及び施設の理解を得て、多くの体験学生をこれよりも長い間体験させるということは難しく、実質的に現状では実現は困難であろう。

そこで、介護等体験をよりよいものにしていくためにできることは、学生の意識向上を高める充実した事前指導のあり方を検討することである。大学側は、これまでの体験から平成17年度体験学生から通常の単位化された講義として設定した。

時間的にはこれまでとあまり変わらないが、単位化されることによって学生の意識は向上することが期待される。

次に、調査の結果で求められている具体的な事前指導の在り方について考えていくこととする。

(1) 内容

表26及び表27は、事前指導において必要だと思う内容で挙げた項目(第2報の「体験学生が事前指導において必要だと思う内容」及び「表23「受け入れ側が事前指導において必要だと思う内容」)のうち50%以上の回答を得たものである。

表26 受け入れ側が事前指導において必要だと思う内容

- ・介護等体験の意義・目的
- ・老いや障害についての基礎的知識
- ・介護・支援者としての心構え

表26 体験学生が事前指導において必要だと思う内容

- ・介護等体験の概要
- ・介護等体験意義・目的
- ・施設及び特殊教育諸学校の概要
- ・車椅子の介助の仕方
- ・食事の介助の仕方
- ・関り方について
- ・介護・支援者としての心構え
- ・老いや障害についての基礎的知識
- ・トラブルの対処法

表26より受け入れ学校及び施設は、事前指導において基礎的な内容をしっかりと身につけてほしいと考えていることが分かる。一方学生は、基礎的知識はもちろんのこと、車椅子の介助の仕方や食事介助の仕方など技術的のことも学びたいと考えていることが分かった。これは、車椅子の介助の仕方はこれまでも事前指導で取りあげられていて実際に役に立ったが、食事介助は実際の体験現場において初めて体験したことで戸惑いがあったために、事前指導の段階において身につけておきたいと感じているのであろう。

「介護等体験の意義・目的」については、約7割の受け入れ学校及び施設が、また、体験学生は約6割が必要だと考えている(第2報)。これまで、事前指導において、「介護等体験の意義・目的」

については、「学生の手引き」に書かれていて内容を読む程度に留まっており、学生自身がその意義について積極的に考える機会はなかった。学生の意識向上を高めるためにも、学生自身が、「なぜ介護等体験が小・中学校教員を目指す人にとって必要なものなのか」、そして、「介護等体験がどのような意義を持つものであるのか」をしっかりと考えさせる機会を設ける必要があり、そのための時間を十分に確保することがまずスタートとなるであろう。

(2) 講義形態

これまでの事前指導は、教員が説明して、学生はその説明を聞くという受身的な講義形態であった。だから、学生は自ら介護等体験の意義や目的について考えたり、自主的に何か学んだりするという機会はなかった。そのため、実際の体験現場において、「消極的な態度である」ということが受け入れ学校及び学校から指摘されたのだろう。そこで、様々な問題に対して自ら考え、その考えを相手に伝えたり、また、他人の意見を聞くことで、自分の考えを見つめ直したりするような場面を多く持つことが重要だと考えられる。話し合う場を設けることで、実際の介護等体験の場において身につけるであろう、相手の考えを受け入れる態度や理解する態度、さらには、コミュニケーション能力を育てることにもつながりより効果的なものになると言えるだろう。

また、説明等の講義のみならず、実際に車椅子に乗ったり押したり、食事介助等の体験的な内容を含むことが大切である。介護・支援される側の気持ちを知り、どのようなやり方で介助・支援をすればいいのかを考える機会を設けることの意義は非常に大きいと思われる。

講義時間を増やし、講義内容を充実することももちろん大切なことであるが、事前指導において最も重要なことは、学生自身の「介護等体験に参加したい」という意欲、モチベーションを高めることにある。そのためにも、過去の介護等体験での苦情のみを取り上げ、注意や指摘などによって体験学生の意欲を低下させることは避ける必要がある。むしろ、体験した人の話を聞かせたり、体験の様子を見せたりして、「自分もやりたい」という意欲を持たせることや、障害児・者や高齢者

に対する興味・関心を深めるための視覚教材などを見るなどして、楽しんで事前指導を受けることでそのモチベーション作りをする雰囲気作りをもっと心がける必要があるであろう。

V 今後の課題

今回の介護等体験についての調査の結果、約8割の学生が意義深く、満足のいくものであったと評価している(第2報)。このことは、その他の自由記述欄において、「介護等体験を通じて、いろんな立場の人、世代の人と行動を共にしたり話を聞かせてもらったりしたことで、自分の世界は広がったと思う」、「介護等体験に行って自分の持っていた社会福祉施設や養護学校のイメージが大きく変わった。人と接する際の基本的なコミュニケーション、相手を思いやる態度というものを改めて学ぶことができたと思う」などの記述からも見てとれる。

しかし、小寺(2001)は「今までのイメージと違ったことを確認するのは大切なことだが、今までのイメージとは何であったのかを再検討する必要がある。それがなければ、児童生徒の笑顔に驚き、彼らがいろいろなことができることに驚いたあとでも、かつての偏見による価値基準のままで児童生徒をみることになり、必要以上の評価をしつづけることにもなる」と指摘している。このことから、学生が「介護等体験は満足いくものであった」と回答していることのみを鵜呑みにして、「よりよい経験となった」と結び付けて評価するのは危険であり、実際に介護等体験を行うことによって具体的にどのような意識の変化があったのかをきちんと分析する必要があることを示唆している。介護等前後において高齢者や障害児・者に対してどのような印象を持っているのかについて、今後も意識調査や体験学生の日誌等をもとにして、きちんと分析していくことが大切であろう。

また、事前指導のみならず事後指導の充実も必要である。事後指導を設けることで、実際に介護等体験によって自分は何を学んだのかを改めて考えさせ、他施設での体験学生の感想を聞き合うことで、さらに老いや障害について深く考えるきっかけとなる。他者の体験や想いを聞くことによ

て自分の考え方を発展させることもできる。介護等体験で身につけたことは、これからの人生にもつながることであろう。しかし、平成16年度はわずかな事後指導の時間も確保できず実施されなかった。まずは各教員間で介護等体験に対する意義を共有し、意識を高めていくことがあわせて必要である。今回は教育学部の学生を対象として検討したが、他学部にも教職を目指す学生は多い。しかし、彼らに対して行われる他学部主催の介護等体験オリエンテーションは、形骸化していたり、オリエンテーション自体が実際には行われていなかったりしているという話も聞いている。今後よりよい介護等体験を実施していくために、そして高齢者や障害者に理解のある教師を育成するためにも、教員を養成する立場にあるすべての大学教員が介護等体験についてもっと勉強する必要がある。

付記

本調査は、平成16年度琉球大学教育研究重点化経費による介護等体験プロジェクトの一環として実施した。本プロジェクトの実施は教育学部の田中敦士と片岡淳が担当した。また、資料整理や分析等には平成18年3月卒業生の比嘉佐和子(現 嘉手納小学校)に協力頂いた。本プロジェクトにご協力頂いた先生方および調査に回答下さいました皆様方に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 小寺慶昭(2001)「介護等体験」の研究(一) 龍谷大学論集, 457, 76-107.
- 三輪定宜(2001) 教育養成・研修における体験学習の意義を問う；介護等体験に関するアンケート調査を踏まえて 教育学研究, 68(4), 461-466.
- 武蔵博文・高畑庄蔵・若山美津彦・平野隆志・小林真・安達勇作(2001) 知的障害養護学校での介護等体験に関する調査研究(Ⅱ)；体験学生受け入れ態勢と実施上の課題 富山大学教育学部紀要, 55, 61-72.
- 田中敦士・片岡 淳(2006a) 介護等体験の実践

に関する研究（第1報）；琉球大学における実践の現状 琉球大学教育学部紀要, 69, 1-8.

問紙調査から 琉球大学教育学部紀要, 69, 9-20.

田中敦士・片岡 淳 (2006b) 介護等体験の実践に関する研究（第2報）；体験学生に対する質